



何を言いたいの、赤ずきんちゃん（第一部）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-12-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 博志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006268

何を言いたいのか、赤ずきんちゃん（第一部）

山 本 博 志

0 序

グリム兄弟が1812年に出版した『子供と家庭のための童話』（以下略称『グリム童話』）に収められた物語『赤ずきんちゃん』（以下略称『赤ずきん』）は『グリム童話』の中でも世界的に有名なもののひとつで、わが国でも誰もが知るところである。特にレレケ論文等最近の研究によって、この物語の起源は以前信じられていたのとは異なり実は古くはフランスで、直接的にもフランスの作家シャルル・ペローであることがほぼ確実となった。編者のグリム兄弟自身が1857年の第7版の序文で、「外国起源のものは再吟味し、除去している」と言っているにもかかわらず、彼らの『赤ずきん』は『グリム童話』に収められたままとなり、以後複雑多彩な受容史を展開することになったのである。この多様な受容の原因を究明するために、本稿では第一部としてまず『グリム童話』の『赤ずきん』についての代表的な解釈例を紹介し、そして第二部ではペローの『赤ずきん』との比較によって『グリム童話』の『赤ずきん』の文学的特質を明らかにすることにする。

1. 1 国粹的解釈 — ヴェルナー・フォン・ビュロー —

ビュローは第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制下のドイツの立場をこの物語に重ね合わせて、アーリア人種観に基づいた極めて排他的な民族主義的自己主張の解釈を企てる。¹⁾

登場人物では、祖母、赤ずきんちゃん、猟師等がアーリア的ドイツ世界を象徴している。祖母は英知溢れる原始母権制度であり、孫娘赤ずきんちゃんはこの母権制度の後継者であるドイツ民族であり、孫娘に与えられたピロードの赤帽子はドイツ法である。さらにこのドイツ法は「人間の気儘からではなく、神聖な教義と伝統から生まれた」ものである、と神話的に解釈される。

風景・舞台に関しては、祖母が住む森の中の小屋は、ドイツ法が語られた神聖な禁断のカンワの木（Banneiche）の下にあって、それはまた民衆集会場を取り巻いていたハシバミの垣根に囲まれているのである。

小道具類も同様に解される。例えば、ワインは神の精霊を表し、ケーキ（焼き菓子）は、原始母権制度が厳格且つ神聖な部族集団に根ざしていることを暗示しているのである。祖母が病弱なのは、原始母権制度が衰微しつつあることを、またワインとケーキが回復剤になるというのは、ドイツ民族が、「生き生きした法感情中に浸るドイツ魂の深みから生まれた神々しい法に復帰しなければならない」ことを表しているのである。

赤ずきんちゃん（Rotkäppchen）の頭文字のRはリグ・ヴェーダ（Rigveda）のRitaのRで、自然、人倫、儀式に現れる万有法則の象徴的表現で、赤ずきんちゃんが花の香りと鳥の

鳴き声に誘われていく様は、自然や世界観に沈潜し、政治や法の問題を蔑ろにするドイツ的心情とその「痛ましい歴史を表している」のである。

ドイツをこのような状況に陥れたのが、狼に象徴される現世的権力欲であり、これをドイツにもたらしたローマ・ラテン文化である。赤ずきんちゃんが狼に飲み込まれる様は、ドイツの理想主義がラテン文化の物欲に減ぼされていく様子を描写しているのである。

このドイツの苦境を救うのが獵師、即ちドイツ人に潜む「神々しい精神人間」である。彼には、世界の隷属化を企てるローマ法の欺瞞と物欲主義を駆逐する任務が課せられているのである。狼が開腹され、腹（＝物欲）に石が詰められるのは、石囲い（Stein-Gehege）であるドイツの法統治による裁きであり、類話で狼が石桶で溺死する羽目に陥るのは、「喜ばしい未来の約束」を確信させるものである。

1.2 深層心理的解釈 — フロム、ベッテルハイム —

1.2.1 アメリカの社会学者エーリヒ・フロムはS.フロイトの精神分析学に則り、童話や神話や夢の素材中に人類史に普遍的な男女両性間にある葛藤の象徴的表現を見出す。彼は、フロイト学説に基づいて古代ギリシャのエディプス物語や創造神話の中に見出されたこの不変のテーマを論証するための好適例として『赤ずきん』を挙げる。²⁾

フロイト流に解されるこの物語の教訓は一目瞭然であるという。赤いピロードの頭巾（ドイツ語の本来の意味は小帽子 Käppchen）は月経のことであり、赤ずきんちゃんが道草をして瓶を割る（『グリム童話』の『赤ずきん』にはこのような描写は存在しない）のは処女喪失のことである。そうなるとこの物語の教訓は、女性の成熟に伴う性的危険を警告したものだということになる。

しかし、フロムはさらに具体的に深層のテーマに迫る。祖母や赤ずきんちゃんを呑み込む狼の行為や、狼が開腹されたあげく腹に石を詰められる様は、彼によれば、懐胎羨望という女性コンプレックスに悩む男性が懐胎を真似る行為であり、このことが不毛の象徴である石で懲らしめられることを表しているという。石詰めは男性犯罪に対する女性側からの嘲笑的報復である。獵師については言葉少なめで、重要な役割を果たさない単なる伝統的父親像に過ぎないという。

ところで、「男性を無思慮で陰險な動物として描いたり、性行為を男性が女性を食べてしまう人喰行為として描くこのような見方は、男性を愛したり、性的快感を感じている女性のものではない。（...）主人公が3世代の女性から成るこの童話は、男性を憎んでいる女性達の勝利を祝う物語である。」これがフロムの結論である。

1.2.2 ブルーノ・ベッテルハイムはフロムと同様にフロイトの精神分析学の立場に立ちつつ、幼児の発達心理学的な観点から童話の深層心理を分析解釈する。³⁾彼はまず『グリム童話』の『赤ずきん』と文学史上の先行話になるシャルル・ペローの『赤ずきん』の本質的相違点を指摘する。ペローの物語では狼が男性の隠喩であることが一目瞭然で、またここでは全てが合理的に理由づけられるため、想像力を働かせる余地はない。ここでの赤ずきんちゃんは聞き手

が自分と同一視できるような主人公ではないので、極めて非娯乐的であり、また聞き手が自発的に、乃至は直観的に意味を発見できるような意味形成の余地もない。それは昔話というより、教訓を与えるための手段、即ち子供から見ると全く無味乾燥な寓話になりきってしまった。

それにひきかえ『グリム童話』の『赤ずきん』は深層心理的に見ると、エディプス期の少女の危機的な人生経験を象徴的に表したもので、より興味深い。両親の家と祖母の家は実は同一の家であり、口唇期を経た、即ち食欲を満足させてしまった赤ずきんちゃんは喜んで祖母のところへ食べ物を運ぶお遣いをしようとする。その際の母の言いつけは現実原理である。赤帽子の意味は、祖母が孫娘に性的魅力を伝授したことで、赤ずきんちゃんに性的目覚めと情動的未成熟の不調和が生まれることになった。狼と狩人は男性、特に父親の二面性の表現で、前者は危険な誘惑者及び破壊者である。この暴力や非合理的行動による目的を達成するという反社会的な傾向は同時に全ての人々に等しく内在しているのである。赤ずきんちゃんが母親の言いつけに背いて狼の誘惑に嵌まる様は、現実原理を無視して快楽原理に身を委ねることであり、また彼女が狼に祖母の家の在り処を知らせる様は、邪魔な(祖)母を亡き者にしたいという無意識のエディプス的願望を表している。狼と添い寝をしている赤ずきんちゃんの反対感情の併存、即ち惹きつけられもし、不快でもある状態、及び性的秘め事の描写は思春期の子供たちを魅了して止まない。そればかりか、誰もが狼に惹かれる傾向をもっているが故に『赤ずきん』に共感するのである。

この話の中心テーマである「何かに食われはしないか」という不安は、親の言いつけを守らないと悪と遭遇し、これが自分と自分が信頼を裏切った親とを呑み込んでしまうのだ、という警告であったのである。しかし、この悪からの救済が男性の他の一面性である狩人によってもたらされる。彼の自我である現実原理がエスの快楽原理を抑え込み、狼の腹から赤ずきんちゃんを救出する。狩人は利他的且つ社会的な思慮深い保護者としての父親像を表しており、彼は、誰よりも父を愛するように父もあらゆる努力をして欲しい、という赤ずきんちゃんの願望を実現してくれる。

狩人が行う狼の開腹手術という暴力は最高に社会的な目的に仕えるものとして、また狼の腹の中での暗闇体験も話に不可欠な一要素として聞き手である子供たちには直感的に予感されているもので、メルヘン(童話)に起こる奇跡は、乱暴な子供の内心を納得させるし、石詰めによる処刑も開腹によって暗示された妊娠と出産の不安を解消してくれるのである。そしてこの奇跡によって成就されたことは、赤ずきんちゃんの不安と苦難は人が生まれ変わる為には不可欠な過程であること、言い換えれば、エディプス期への退行を起こしてはならないこと、暫くは保護者としての父親に庇護されていた方がよいこと、母親という超自我を無視することはより高次の自我体制に至るためには必要である、といったことなどである。『グリム童話』の赤ずきんちゃんは自分の経験を通して自分を変えており、「彼女はもう子供ではない、両親と正しいつながりを持つ若い娘として生き返ったのだ。」

1. 3 社会学的解釈 — イェーガー、ザイプス —

3. 1 自らの解釈手法を構造主義的方法と呼ぶハンス・ヴォルフ・イェーガーは『グリム童話』

が編纂された当時の歴史的及び社会的背景を考察の中心に捉えることによって、『赤ずきん』中の概念や形象の歴史的含意 (Konnotat) を解明することによって、如何に編者が『赤ずきん』に特別な価値を付与していたかを論証してみせる。⁴⁾

領主至上主義の封建制度を超え、自由主義的に統一されたドイツ国家を夢見ていたグリム兄弟にとって、未来の祖国ドイツを保証するものはドイツ語、ドイツ文学、ドイツの口承民話であったが、『グリム童話』は次のように政治的位置づけがなされるのである。即ち、『グリム童話』が「教育書として役立つように」、と編纂者であるグリム兄弟自らが言った真の意味は、それが家庭内で子供の教育や躾けに役立つのは、それが政治的及び社会的経験を反映しているからに他ならない、ということである。『グリム童話』が編纂され始めた1806年から初版が出た1812年は、祖国ドイツがフランス革命とナポレオンのロシア遠征の余波で、部分的にしてもフランスの統治を蒙るという政治的苦境にあった時期で、特にグリム兄弟が当時暮らしていたヘッセン州はナポレオンの弟ジェロムによる植民地支配を受けるに至り、彼らはこの事態に対して内心猛烈な反発を感じていた。このような政治的状况下で『赤ずきん』は歴史的含意を備えるようになったのである。

森の中の道で狼が赤ずきんちゃんの歩き方を、「学校へ行く時のようだね」と揶揄して、自然の美しさに目覚めさせようとする様は、18世紀に於ける「自然対学校」というテーマを想起させる。狼や森に代表される自然はグリム兄弟においては、立憲・共和体制を含意し、これは当時のドイツでは自由思想の飾りで誘惑しようとする植民地支配を意味し、道に代表される学校は、秩序を重んじるドイツの絶対主義体制と先祖伝来の祖国への忠誠を含意していたのである。

「狼＝フランスの侵略者」という定式は、保守的なドイツの出版界がフランス革命の勃発とその後の急進派による政権掌握後に、革命派やその密偵やドイツでのその同調者を狼と呼んだことに由来する。そして、この表現はグリム兄弟やE.M.アルントのような自由主義者までも受け入れられたのである。

ペローの『赤ずきん』では、主人公の赤ずきんちゃんは狼に食べられて話が終わっており、文学史上の『赤ずきん』で猟師が登場するのはルードヴィヒ・ティークの翻案が最初である。彼のこの発案によって、狼、赤ずきんちゃん、猟師という登場人物に極めて濃厚な政治的含意が俄に発生したのである。

18世紀末において赤色はジャコバン党のフリギア風赤帽子を連想させ、革命とその理念及び自由の象徴であった。当時ドイツでも赤帽子、共和派帽章、自由の樹が大流行していたことは、ゲーテやシラーも証言しているところであり、ティークも1793年まではフランス革命に共感していたのである。ティークの狼像は当時の政治的状况が二面的に反映している。一面では、狼を啓蒙、開放、政治的進歩に殉じる志高き者と仰ぎ、他面、狼を排斥すべき危険な煽動者、政治的墮落者と見ているのである。また彼の翻案には、犬が登場するが、これは猟師の共犯者で、政治的には現状擁護者である。ここに、「狼＝自由・野性」対「犬＝不自由と卑屈」という政治的対立の構図が浮かび上がってくる。また、赤ずきんちゃんは赤色を自慢し、赤帽子を決して放そうとしない。赤色に気触れた赤ずきんちゃんが狼に食べられてしまい、猟師の発砲も手遅れになるデッド・エンドに潜む思想は、流行や若気だけで秩序を転覆しようとするような思

想に係わると自分自身を破滅させることになるということである。

両親や権威に逆らう赤ずきんちゃんの行動は家庭的教育的問題と一般的政治的問題を暗に示唆していることにグリム兄弟は気づいていたようだし、彼らの『赤ずきん』もこのような連想を決して排除していない。確かに若者が誘惑や悪魔と無邪気に付き合おうことを警告しているのである。元来デッド・エンドであった物語を、ティークの発案を受け継ぎ、ストーリーを〈誘惑－暴行－開放〉のハッピー・エンドに転換することがグリム兄弟には極めて重要と思えたにちがいないのである。

1. 3. 2 ジャック・ザイプスはイデオロギー批判の立場から、昔話が人々の想像力や行動様式に拭いがたい刻印を与えている様、そしてその好適例として『赤ずきん』の特異な歴史を詳らかに論じる。彼の『赤ずきん』解釈全体は、「狼が赤ずきんちゃんを呑み込んだり、食べたりするのは明らかに性行為であり、自然の抑えきれない欲望や混沌を象徴している」、という大前提に立脚して展開していく。⁵⁾

『赤ずきん』の先行昔話をペロー以前へ逆上ると、主人公の少女は抜け目なく狼を欺いて、自分で自分を救い出し、殺されることはない。そこでは少女は学習と葛藤を通して自己を主張するようになる。それは若い百姓娘の自立を祝福するものでもあった。しかしペローがそのような口承民話を、自分が属していた上流の知識階級の大人と子供向けにするために、もともとあった残酷な部分、幼稚な部分、不穏当な部分を削除したり、主人公の性格を率直で勇敢な抜け目ないものから、可愛くて、甘えたで、騙されやすく、頼り無いものに変質してしまったのである。特にペローの発案である赤ずきんちゃんの赤色は、当時一般的に罪、肉欲、悪魔などを連想させるものであった。このようにスポイルされた性格の主人公は狼によってさらにスポイルされることになったのである。良い思いを夢見た自分が犠牲になって、狼が良い思いをすることになる。このようにしてペローは農民や村人達の実際的な状況を素直に映し出していた民話を、自ら無意識的にレイブを招く、自助能力のない少女像を新たに創り出したのである。

このように「ペローのなした芸術的偉業は、民話のモチーフを盗用してそれらを全く別のイデオロギーに染め上げ、プロットの諸要素を上流階級の大人と子供にとって受入れやすいように様式化したことにある。」そしてそのイデオロギーとは、社会的動揺や不安や混沌を恐れていたブルジョワ・貴族階級がキリスト教支配、男性支配、新興産業グループの他の階級に対する支配を確固なものとするために、即ちブルジョワジーの利益拡大と強化のためにブルジョワ・貴族階級の価値観、及び彼らの生活様式の特権性や優越性を強化することであった。「『赤ずきん』は文明化の意図の下に子供たちの生来の性癖を制御することを狙った文芸的な言説に男のファンタジーを投影したものである。」イデオロギーに染まったこの再話が口承民話に再吸収され、後にグリム兄弟の『赤ずきん』を産むことになるのであった。

グリム兄弟はペローを凌ぐ浄化作業を決行する。まず「赤ずきんちゃん」を「赤帽子ちゃん」に改名し、「狼と七匹の子山羊」のモチーフを借用して終焉部をハッピー・エンドに改作し、残虐性と性的欲望を削除し、主人公を完全に不従順で無力な少女に変えてしまった。「魔女や人狼を信じなくなった時代に必要とされるようになったのは、無垢で無力な女性像であり、悪

魔と契約を結んだり自分の空想力にのめり込んだりしかねない女性像を創り出すことであった。」ペローは人狼を狼に摩り替え、少女に赤ずきんを被らせることによって、魔女や異端と契約したり、それらに変身しかねない資質を身につけさせたが、グリム兄弟の赤ずきんちゃんは母親との約束を破り、「狼＝悪魔」との契約を結ぶことによって、官能的快樂への耽溺と不服従という罪を犯し、狼にレイプされた責めを自ら全面的に負うべきとされるのである。自分の内なる自然である官能性と外なる自然の喜びを楽しもうとする赤ずきんちゃんに社会道德の枷を嵌めようとする意図によって、『グリム童話』の『赤ずきん』は法と秩序を明瞭に語る道德物語になったのである。

「狼は自然の衝動や社会に順応しない生き方のシンボル」であり、その含意するところは、下層階級の無法者や逸脱者のことである。また石詰めの刑は、「性を抑圧する規範を為政者の策略通りに内面化させる」ための懲罰である。ところで、この話の本当の主人公は獵師である。彼は権力の威力を象徴し、官憲を含意する。また、彼の目指すものは男性による支配である。結局『赤ずきん』は、「女のセクシュアリティに対する男の恐怖を表した」、男性が創り出したブルジョワ文芸民話の典型であるに過ぎない。

文献

- 1) Werner von Bülow, Märchendeutungen durch Runen. Die Geheimsprache der deutschen Märchen. Ein Beitrag zur Entwicklungsgeschichte der deutschen Religion. Hellerau bei Dresden: Hakenkreuz-Verlag 1925. S.28-32.
- 2) Erich Fromm, Märchen Mythen und Träume. Eine Einführung zum Verständnis von Träumen Märchen und Mythen. Konstanz Stuttgart: Diana Verlag 1957.
- 3) Brune Bettelheim, The Uses of Enchantment. Meaning and Importance of Fairy tales. New York 1976. 邦訳：『昔話の魔力』波多野完治・乾侑美子共訳 評論社
- 4) Hans-Wolf Jäger, Trägt Rotkäppchen eine Jakobiner-Mütze? Über mutmaßliche Konnotate bei Tieck und Grimm. In: Literatursoziologie. II. Beiträge zur Praxis. Hrsg. von Joachim Bark. Stuttgart: Kohlhammer 1974. S.159-180.
- 5) Jack Zipes, The Trials & Tribulations of Little Red Riding Hood. Bergin & Garvey Publishers, Inc. 1988. 邦訳：『赤頭巾ちゃんは森を抜けて』 廉岡糸子・横川寿美子・吉田純子訳 阿吽社